

強者の戦略

世界史〔名古屋大学 1995年より〕
ではあらためて問題を確認します。

16世紀から18世紀にかけてのいわゆる絶対主義の時代、ヨーロッパにおける諸国間の国際関係は王朝の利害を軸に展開し、均衡勢力の維持のため、しばしば戦争が引き起こされた。このヨーロッパでの国際関係のうち、16世紀初頭から18世紀半ばまでのスペイン・フランス・オーストリアの3国をめぐる動向について、次の語句を参考にしながら、300字以内で論述しなさい。

ハプスブルク家	ブルボン家
カルロス1世	ルイ14世
三十年戦争	ユトレヒト条約
外交革命	

一見すると、スペイン・フランス・オーストリアの動きをただ書いていけばいいんだ、そんなに難しくもないな、と思ってしまいますが、そのまま書くと煩雑な文章になってしまい、300字では収まらなくなってしまいます。問題をよく読んで、一つ一つ問われている内容を確認していきましょう。

<問われていることを確認>

今回の主問は「このヨーロッパでの国際関係のうち、16世紀初頭から18世紀半ばまでのスペイン・フランス・オーストリアの3国をめぐる動向について」です。時期ははっきりしています。そして3国の動向であることも分かります。ただ気になるのが「このヨーロッパでの国際関係のうち」という言葉です。ということは、その前の文章をふまえる必要がありますから確認していききたいと思います。

「16世紀から18世紀にかけてのいわゆる絶対主義の時代」

→これは分かりますね。特に問題はないかと思いません。

「ヨーロッパにおける諸国間の国際関係は王朝の利

害を軸に展開し、均衡勢力の維持のため、しばしば戦争が引き起こされた。」

→ここですね。実はこの問題の一番のポイントとなります。「国際関係が王朝の利害を軸に展開され」ですが、「3国の動向」は「2王朝(王家)の動向である」ことが分かれば文章構成をシンプルに考えることができます。

16世紀の各国王家はこのような状態でした

- ・スペイン…1516年よりカルロス1世が即位

(ハプスブルク家)

- ・フランス…ヴァロワ家→1589年にアンリ4世即位

(ヴァロワ家・ブルボン家)

- ・オーストリア…中世以来ハプスブルク家が支配

↓

ところが1700年にスペイン＝ハプスブルク朝が途絶えると、ルイ14世の孫のフェリペ5世が即位し、スペイン＝ブルボン朝が始まります。

スペイン…ブルボン家

フランス…ブルボン家

オーストリア…ハプスブルク家

以上で分かるとおり「3国の動向」という問いは、**フランス王家(ヴァロワ家・ブルボン家) 対 ハプスブルク家の関係**を書いていくことなんだということが分かると思います。ヨーロッパの歴史はフランスとドイツ勢力が本当に長く対立していますね。この時代もそうですし、ナポレオン時代、プロイセン＝フランス戦争(普仏戦争)、第一次世界大戦、第二次世界大戦など、ずっと戦っています。その度にヨーロッパは大きなダメージを受けてきました。そうした過去があったからこそ現在のヨーロッパ連合につながるのでしょう。今のフランスとドイツはEUの中心ですからね。

なお「諸国間の国際関係は」とあるので、対立があったのかなかったのかを書いていけばよいでしょう。

強者の戦略

う。

<世紀ごとに内容を確認>

○16世紀

16世紀は、イタリア戦争がずっと続いていました。イタリア戦争は1494年にフランス＝ヴァロワ朝のシャルル8世がイタリアに侵入したことから始まり、フィレンツェからメディチ家が追放されるなど激しくなりました。一番激しく争ったのが、16世紀のフランソワ1世と、神聖ローマ皇帝カール5世（スペイン王カルロス1世）との対立です。ヴァロワ家とハプスブルク家の対立であることが分かります。この戦争は単に2国（2王朝）の間の争いだけではなく西欧の国々のほとんどを巻き込みます。またオスマン帝国（スレイマン1世）の北上、フランスとオスマン帝国が同盟を組むなど、神聖ローマ帝国にとっては厳しい状況になります。こうした背景もあって、ヨーロッパでは主権国家体制が形成され始めます（主権国家体制確立は三十年戦争後のウェストファリア条約）。なおこの戦争でイタリア＝ルネサンスは荒廃し、ルネサンスの中心はアルプス以北に移っていきました。

イタリア戦争は、1559年のカトー＝カンブレジ条約で終わります。スペイン＝ハプスブルク家のフェリペ2世、フランス＝ヴァロワ家のアンリ2世、イングランド王エリザベス1世を中心として講和を結びました。フランスはイタリアに関する権利を放棄、ハプスブルク家はミラノ・ナポリ・シチリアなどを領有します。これでヴァロワ朝とハプスブルク家の対立は一旦終わったかに見えますが、実はフランスで1562年からはじまるユグノー戦争で、スペインはフランス内の旧教勢力を支援しています（またイギリスも新教勢力を支援し、英とスペインの代理戦争のような様相でもありました）。このユグノー戦争中にフランスのヴァロワ家は断絶し、1589年にアンリ4世が即位してブルボン王朝が始まります。

○17世紀

17世紀のブルボン家とハプスブルク家の大きな対立といえば、やはり三十年戦争でしょう。1618年に始まった三十年戦争は神聖ローマ帝国内の宗教対立から始まりましたが、次第に打倒ハプスブルク家をかかげてヨーロッパ各国が介入し国際的な戦争となりました。この戦争でフランスは新教側につき、ハプスブルク家に勝利します。フランスのブルボン家はヨーロッパの王家となり、ルイ14世の下、絶対王政の絶頂期を迎えます。一方でハプスブルク家は衰退することになります。

○18世紀（半ばまで）

18世紀になってもブルボン家とハプスブルク家の対立は続きます。1700年にスペイン＝ハプスブルク家のカルロス2世が亡くなりスペイン王家が途絶えます。カルロス2世の異母姉（マリア＝テレサ／マリー＝テレーズ）がフランスのルイ14世に嫁いでいることもあり、ルイ14世は孫のフィリップ（フェリペ5世）のスペイン王位継承を主張、これに反対する勢力との戦争に突入します。これが1701年から始まるスペイン継承戦争です。この戦争は1713年のユトレヒト条約で終わりますが、この戦争、そして1740年からのオーストリア継承戦争でもブルボン朝とハプスブルク家は対立します。

転機が訪れるのは、オーストリア継承戦争後、七年戦争前です。

問題では「18世紀半ばまでの」とあるので、参考用語にある「外交革命」がこの時代で使われるところでは。

オーストリア継承戦争時にプロイセンのフリードリヒ2世にシュレジエン地方を奪われたオーストリアのマリア＝テレジアは、長年のフランス王家との対立を捨てて手を組んで、プロイセンに対抗することにします。これを外交革命といい、このときに娘のマリー＝アントワネットがフランスに嫁ぐことになります。

